宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代② 1311
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品　株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目三五番三号（〒八一三）電話福岡（九二）六五一九四五六六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三三四一（代）・三三一一三四・六〇六番

七浦漁民の真心こめて

―若布献上無事終える―

宗像大社海洋神事奉賛会の行事による若布献上の儀は、三月七日宗像大社宮司菅津嶺之、随員一名に、郡内七浦の漁民代表として神湊漁協組合長田中吉助、勝浦漁協組合長花田経広の四名により無事献上された。

先ず、宮中に参内して侍従職を通して「玄海七浦の漁民が栄中海に入り、採取した天然の早若布であります」と奏上の上献上。引続き、掌典職を通して賢所に参上し奉献。更に、新殿の榊の香も清々しい東宮御所に参内、皇太子、皇太子妃殿下に献上申し上げた。

献上にあたり宮中で侍従より若布を採取される漁民の皆様方に「玄海の幸、嬉しく思ふと伝えて下さい」とのねぎらいのお言葉が伝達された。

本年は、暖冬異変によって、水温が高く、若布の成育が例年より早くて品質も劣りかねはしないかと言う事ではあったが、「献上若布だけは他に見劣りしない最上のものを」といろいろ苦心され、各漁協とも丹誠こめて調整された印象あって特に早春の磯の香もかんばしく、しかも濃緑の美しい見事な若布であった。

尚、宗像大社春季大祭の当日、献上若布採取に功労のあった記の方々に宮司より表彰状が贈られた。

名称	（敬称略）
鐘崎漁協組合	八尋　保
〃	権田新一
津屋崎漁協組合	北野市郎
〃	西住市住
神湊漁協組合	松下　栄
〃	永島二夫
地島漁協組合	山下　茂
〃	安部藤美

（写真は宮中賢所）

皇霊殿遙拝式斎行さる

―宮司以下全職員奉仕―

宗像大社では去る三月二十一日午前十時から宮司以下全職員奉仕のもとに春分祭（皇霊殿遙拝式）が斎行された。

この祭典は春秋の二季、彼岸の中日に天皇みずから皇霊殿に出御され、お仕えになった皇霊の大祭とされ国民挙げての大祭事であった。

宗像大社では去る三月二十一日午前十時から宮司以下全職員奉仕のもとに春分祭（皇霊殿遙拝式）が斎行された。

この祭典は春秋の二季、彼岸の中日に天皇みずから皇霊殿に出御され、お仕えになった皇霊の大祭とされ国民挙げての大祭事であったが、制度の変革にともない、現在では皇室の私的行事としてお仕えされているため、各社に於いてもその多くが陛下の遙拝に併せ皇霊殿を謹みて遙拝申し上げる遙拝式だけとなっている。

この皇霊殿は賢所、神殿とともに宮中三殿といわれる神殿の一つで、中央に賢所、東に神殿、西に皇霊殿の位置で祀られている。

因に賢所は天照皇大神の霊代（みたましろ）が祀られ、天皇の御即位などが行われる。神殿は旧八神殿の祭神（神産日神、高御産日神、玉櫛産日神、生産日神、足産日神、大宮売神、御食津神、事代主神）と天神地祇が天皇の守護神として合せ祀られており、やはり春分、秋分の日に親祭がなされる。そして皇霊殿には歴代の天皇、皇后、皇親が祀られており、地球上の昼夜の長さが等しくなる春分、秋分の日に天皇陛下が大いなる自然の恵み、神々の恩恵を感謝されるとともに、皇祖をうやまい、皇霊をお慰め申しとげられるのである。

このことは一般に於いてもお彼岸などといい祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ祖々の行事が行われていることと同じである。

今日では春分、秋分の日と共に国民の祝日となっているが、とくに前者は春分にあたり自然をたたえ生物をいつくしむ日としての祝日であることを知らずにいる人が以外に多いのではあるまいか。

公害や自然破壊、こういう言葉を耳にしないですむようにしたいものである。そのためにも国民一人一人がこの日をただの休日に終らせず、春分の日、春分祭の意義を再認識する必要がある。

この日は雨模様であったため遙拝式は当社斎館で斎行され、全職員の敬虔な祈りが捧げられ次第である。

×　×

【御案内】

「沖津宮現地大祭」申し込みについて

来る五月二十七日、沖ノ島鎮座宗像大社沖津宮に於て、日本海々戦記念日を下して、国家鎮護祈念の現地大祭を斎行いたします。

毎年海上保安庁の御厚意により大島から巡視船に便乗、海上五十大キロ彼方の沖ノ島に渡り、沖津宮で大祭を斎行しております。

本年も左記要領により御奉仕申し上げますので、御希望の方は御申し込み下さい。

但し、関係筋より人員の制限を受けておりますので、御希望のお方は一旦四月末日までに、仮申込み、又は二連絡下さい。

その後、正式申し込み書を御送付申し上げ、返信到着順に受付を致いたします。

記

一、参拝者には沖津宮大祭奉賛費として一名につき一口弐千円以上の献納をお願いいたします。

一、前日大島に斎泊して頂きます。

一、遊山、魚釣等は目的とした参拝者は固くお断り致します。

論説　江河と川流

大陸と列島、それは廣漠たる大平野を祭祭と流れる江河と谷間の岩に砕ける川流との比較が、それぞれが持つ自然の風土やそこに住む民族の習性の異質を考えさせる。大陸には揚子江をはじめ大河が長く横たわり、江河の名を持っているのに反して、わが列島には長距離にわたる江河はなく、名は川の文字が当てられている。

上海近くの江上を見渡せば、狭い川幅しか知らぬ日本人には河の実感が湧かない。向う岸が見えない揚子江の岸辺に起っては、背後の廣大な国土と民族の特性が教えられる。思慮ことに大きく位置変る黄河をも考え合せるとき、せっかちな国根性とゆったりした大陸気風とが浮かれるのである。

黄河の何十年かに変動する自然か、易性革命の根源でもあるまいが、大陸人と列島民の歴史的性格は風土が育てたものであることを、明確に知ることができる。

即ち、宗教理念、社会意識・政治思想等の歴史上に観られる大きな相違、芸術価理教育に亘る民族感情の距離、それを置えると鎮守の森と清流が生んだ信仰形態と、大平原に仰ぐ星空が養った自然順応との異質が、根源的に観察される判別さるのである。

然し、大陸人は隣人である。少くとも好意的である率直である批判や忠告は、虚心坦懐に耳を傾けねばなるまい。そして反省と足正の糧としなければなるまい。ましても戦前日本の教育を受け、民族性の長短をよく識る温かい忠告なら、有難く傾聴して列島改造のための政治経済文化の課題に、役立てる寛容がなくてはならない。

江河の流れに中国民族は長い歴史を経過して、特有の国民性を培ってきた。その中国の文化の中心は漢民族の育れた指導にあった。日本の歴史をよく知り、日本人を理解する盛氏は、漢の名門の末裔で今も東京に中華料理の経営を続けている。筆者は十余年前から数回彼に会う機会があった。

「昔から中国には三育並進という言葉がある。その第一は徳育であり、第二は体育そして第三は知育である。この三育は並進しなくてはなりぬが、第一に徳育を挙げているのは徳育が人作りの根本をなすものだからである。たとえ知育に近くとも邪な人間はたくさんいる。小学校を出ただけで人の師表に立つような人を日本にもいる。

ところが、今の教育は知育偏重に大きく傾いている。幼稚園から知識の詰め込みをやっている。小学校は有名中学への進学を目的にしていると、中学は有名高校へ、高校は有名大学への進学教室だ。これは教育が立身出世の道具に使われているからで一歩誤ると知能犯を作り出すことにもなる。

人間の智慧が道徳の規制を受けない場合は悪い方へ発達するのは当然だろう。家庭の躾を正すと共に知育偏重のあり方を徳育中心に切りかえることが、青少年教育の眼目であるべきである」

と述べて教育のあり方を批判し、二千何百年の日本の歴史に誇りを持たせるように指導すべきだ、若い人々にアジア建設という大目標を与えよ、と指摘している点は目しなければならない。

「昔の日本は、勤倹貯蓄で地道な蓄積をはかり、明治維新の大業を成しとげたが、今の日本は昔々から観ればレンヤと月賦の国である。遊ぶべきでない時に遊び狂わなくてすむ物を背伸びして買っている。これで国の経済が良くなるなら苦労はいらない。有産階級はゴルフ、青少年はボーリング、中産以下はパチンコだ。挙国皆享楽、こんな贅沢はなぜだろう。結局は姿勢がなるがゆかんでいるから、別作用としてこういう現象が起ってくるのだ」

手痛い直言である。この副作用現象を更に具体的事例を挙げて、精神も教育も、政治経済も地固めができていないからだ、ときめつけている。

更に盛氏は、日本経済への処方箋を提示し、奇策を排し常道に立ち戻ることを説いている。臥薪嘗胆の苦労を避けて、特効薬やインスタントを好む日本人は、精神的重症患者だから、漢方薬による長期療法に方向を変えよ戒めている。そして二千数百年の伝統ある日本民族はやがて大和民族本来の真面目に立ち返ることを確信し、心から切望すると結ぶ。

江河に生きる大陸人が、わが国をどんな風に見ているかを考える時、列島を患者の薬局に改悪してはならないことを痛感する。

阿蒙少言

世は挙げて観光時代、偉人の遺徳や風景信仰遺跡に至るまで観光ブームの波に乗る。地方開発・過疎防止の施策として、工場誘致を汗尽すれば今流行の公害非難が喚き出す。地方自治体は観光資源に活路を見出すが無難と心得る○観光時代に急テンポの観光開発を助長するのに観光会社がある。商業旅館等の団体は勿論だが、交通新聞、はては食品会社までが種々の企画に餘念なき有様。春秋の好季に限らず、観光バスは行楽客を大量輸送し、航空機による海外旅行の募集も派手になってきた○バスガイドも名所旧蹟の案内に詳しく勉強している。神話伝説の研究から、クイズの材料まで、乗客を飽させない呼吸が必要。どこえ行ってもガイドが同じ様なことを喋るひとさはそうに車内放送するのが、神功皇后や弘法大師である「この島は時代考証が映画演劇などで証しく、又うるさい街の学者のあげ足取りもあるので、資料のない神様の物語が無難です」と、観光案内氏の弁。そこで近世の史話などは、ガイドブックに登場しない○今は故人の博多人形師に聞いたことがある。黒田節の槍を持った豪傑武兵衛の袴は、一流人形師も誤った作品を出している。太兵衛が福島正則の臣に使者となった時に、まだ袴は筒袖なものであったと。言われて偶々テレビ映画を見ていたら、江戸初期の武士の服装は後の泰平時代と違っていた○観光バスは考証学者や史学専門家の論議まで詮索の必要はなく、恵比須さんや弘法さんの二利益功徳を、面目おかしく旋説すれば足る○全国の大師の事蹟を集めて計算したら、何百年もかかっていただろう。大師は何百歳かの長寿を持ったことにもなるが、嘘も真もない。その時代の世民の願望が理想化されて生れた伝説と見れば よい。（白雲）

第二四一回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

閣迫の庭に散りしく山茶花の花びらのみが春れきらずあり　福岡　麻生　初栄

性別等何にあらむ貝安く生れ出でよと祈りに祈る　原町　八波　五月

雲ふるめ日々の続けは鯉どもの朝けといつに口あけて寄る　久留米　篠田太郎坊

誘致を汗尽すれば今流行の公害非難が喚き出す。地方自治体は観光資源に活路を見出すが無難と心得る○観光時代に急テンポの観光開発を助長するのに観光会社がある。商業旅館等の団体は勿論だが、交通新聞、はては食品会社までが種々の企画に餘念なき有様。春秋の好季に限らず、観光バスは行楽客を大量輸送し、航空機による海外旅行の募集も派手になってきた○バスガイドも名所旧蹟の案内に詳しく勉強している。神話伝説の研究から、クイズの材料まで、乗客を飽させない呼吸が必要。どこえ行ってもガイドが同じ様なことを喋るひとさはそうに車内放送するのが、神功皇后や弘法大師である「この島は時代考証が映画演劇などで証しく、又うるさい街の学者のあげ足取りもあるので、資料のない神様の物語が無難です」と、観光案内氏の弁。そこで近世の史話などは、ガイドブックに登場しない○今は故人の博多人形師に聞いたことがある。黒田節の槍を持った豪傑武兵衛の袴は、一流人形師も誤った作品を出している。太兵衛が福島正則の臣に使者となった時に、まだ袴は筒袖なものであったと。言われて偶々テレビ映画を見ていたら、江戸初期の武士の服装は後の泰平時代と違っていた○観光バスは考証学者や史学専門家の論議まで詮索の必要はなく、恵比須さんや弘法さんの二利益功徳を、面目おかしく旋説すれば足る○全国の大師の事蹟を集めて計算したら、何百年もかかっていただろう。大師は何百歳かの長寿を持ったことにもなるが、嘘も真もない。その時代の世民の願望が理想化されて生れた伝説と見れば よい。（白雲）

雪ふるめ日々の続けは鯉どもの朝けといつに口あけて寄る　福岡　江崎　琴子

菅の初音きくつしみじみと庭の茂みに見入る朝かも　深田　中野　節子

ハネムーンの吾が子が土産の紬のバック眼鏡をかけて幾度も見る　田久　立花　勇雄

わが里も都市化すゝみて二の冬は石焼芋の呼声のきこゆ　田熊　鷲津かつ代

安徳帝御陵　阿弥陀寺陵鎮みおはすをあなかしこ荒ぶる潮の風まともなる　福岡　桜井　ツ子

暖かに寒の雨あかりゆく庭何鳥かこえの澄めるひそさ　名残　竹原　圓

温泉に行けと朔が包みてくれし金いくばくにせよ思いがけなき　曲　天野トモヱ

冬枯れの千間堤に点々と蕊珠沙華の咲きくなり来る　田島　吉武　武雄

君なます遠か彼方を偲びつゝ両さす空一人佇む　東郷　藤崎　辰子

銀の棒すべるに似たり霜とけの空に蒼なき一機見とゞく　田久　小方　実

水底の岩もあらはにたゝえり湯川の春の美しき海　勝浦　永島　文子

吾が船も影色にこめて眺もりしカメラ向くる人指をさす人　徳重　石松やす子

憧かなる針仕事にも肩こりて火鉢守りつゝ一日の過ぎぬ　吉武　早川　須磨

水平線は霞のことと鎧崎の浜の真砂に春ふらちけく　光岡　河村　久光

みゝとも春とも思えるこの頃の風の冷たく畳に草芽ぶく　津屋崎　内田　久美

仄かなる沈丁花の香りたよいぬ夕べ境内を戻りて来れば　戸畑　田中　桂一

火災にて死者を出しる外科院長とつとつとの公弔辞胸うつ　武丸　立石ろせ乃

末の子の嫁が手編の羽織り下あたたかく着て街に出てゆく　宗像　中村　幸

和む陽を浴びて初孫と遊ぶ日々海に逝きにし夫の忘れつゝ　津屋崎　占部　由久

枯れ草も土手の柳も蒼なて降る春雨に見覚めそめけり　津屋崎　麦野　時雄

湯の児より本渡にわけ逆コース天草五橋を次々に見る　津屋崎　菱花　女

湯加減は如何と恐怖に聞きつゝ勤めを終えて湯槽に浸る　戸畑　田中　桂一

小鳥来て庭の椿咲きはじめ朝手足のはして体操の習慣す　大井　安部　静子

何時の間に莽吹くるものか草の中伸びし菊苗根分け近かり　宮田　北原　君子

春雨に見覚めそめけり　津屋崎　麦野　時雄

湯の児より本渡にわけ逆コース天草五橋を次々に見る　津屋崎　菱花　女

湯加減は如何と恐怖に聞きつゝ勤めを終えて湯槽に浸る　戸畑　田中　桂一

小鳥来て庭の椿咲きはじめ朝手足のはして体操の習慣す　大井　安部　静子

此の部屋の日差し温しか鉢植えの苺の苗は日を花つく　大井　吉田ますみ

歳行て何をなさむと来る年に心虚しく歳そはを食ふ　宮田　片山　一

ひとしきり窓を暗めつ降りし雨晴れて針の目やすく通りぬ　宮田　片山　一

静かなる山の湯宿に降る雨を心足らひて友と語りぬ　東郷　田中ハル子

春浅き海に向えば波騒き汀に死魚の白き腹かえす　戸畑　藤井　孝子

うらゝかな春の海辺の潮干狩り沖の鳴も波に戯むれ　日の里　安部さつき

病院の待合室にわれに似し病状なげく主婦に会いたり　福岡　吉田　信夫

ばあちゃんとまんまんちゃんになれと言ふをいやいやをする水俣の子よ　宗像　中村　幸

ひと処陽の射す庭の石の上まんなん割りつゝ身のしまる寒さ　吉留　白木うめの

三十分屋を開き霜とかしまた使はるる吾が家の冷蔵庫　戸畑　田中ハツセ

好きにせよと一日まかせし吾が厨娘がなせし後を片付けてゆく　戸畑　田中　桂一

病院の待合室にわれに似し病状なげく主婦に会いたり　福岡　吉田　信夫

ばあちゃんとまんまんちゃんになれと言ふをいやいやをする水俣の子よ　宗像　中村　幸

静かなる山の湯宿に降る雨を心足らひて友と語りぬ　東郷　田中ハル子

春浅き海に向えば波騒き汀に死魚の白き腹かえす　戸畑　藤井　孝子

うらゝかな春の海辺の潮干狩り沖の鳴も波に戯むれ　日の里　安部さつき

きれいになった心字池に
錦鯉二百匹放流
―宗像淡水魚養魚組合より奉納―

境内の桜花も満開と咲き匂う三月三十一日の午後、春季大祭を目前にして当宮心字池に美事な錦鯉大小二百匹が奉納された。既報のとおり心字池は循環化装置が設置され、池の水は以前に比べて見違えるようにきれいになり、放流されていた錦鯉の美しい群遊の姿が眺められるようになった。これを機に更に多数の鯉を放流等べく地元養魚業者の方々に奉納方を御願いしたところ、快く承知頂きこの度の奉納となった。

奉納者は宗像淡水魚養魚組合、組合長市丸陽三氏外十三名の方々で、色鮮やかな錦鯉が、神前でお祓いを受けた後、次々に心字池に放流された。これにより従前の鯉と合せて総数約五百匹に近い錦鯉が池に放たれた訳であるが広い池面にはあちこちに群遊の一団が散見され、足を止めて観賞する参拝者の姿も目立って増してきた。

宗像郡に於ける錦鯉の歴史は約十五年程であるが、玄界灘に面した当地方の気候と水質が非常に養魚に適し、色あがりが鮮明で順調な成育を遂げ、近年、「宗像鯉」として高い評価を受けるに至っている。

「私達の氏神様である宗像大社の神池に沢山の宗像鯉が泳いでいるということは地元養魚者としては非常な誇りであり喜びであります。多くの参拝者に楽しんで頂くよう今後とも協力させていただきます」これは市丸組合長の談であるが、真心からなる御芳志には感謝の外はない。

当宮では今後一層心字池を整備し、更に多数の錦鯉を放ち、鯉の名勝として参拝者に楽しんでいただきたいと念じている。

剣道大会等盛大に行わる
―春季大祭神賑行事―

当宮春の大祭の神賑行事は好天に恵まれ、特別参列者、一般参拝者ら多数により盛大に執り行われた。

去る三月三十一日の大祭宵宮祭に始まった当宮春季大祭は四月一日、二日と大祭の祭儀が斎行されたが、これに併せて神賑行事が行なわれ奉納舞を始め剣道大会、自衛隊音楽隊の奉納演奏、献茶、献花などが境内各所で行われた。

特に剣道大会は福岡県剣道連盟宗像支部が創立二十周年を迎えたため、同支部挙げての記念行事となり、一日午前九時から関係者など多数が列席して行われた。

大会は郡内を二つに割る東西対抗とされ、西が玄海・津屋崎町、東が宗像・福間町から分れ選手は小学生十名、中学生五名、高校生二名、大学生三名、一般六名の二十五名づつによって白熱戦をくりひろげた。戦果は奇しくも実力伯仲して試合は大接戦となり取得勝数が一本だけ多かった東軍が辛うじて勝利をおさめ、この記念すべき奉納大会の幕をとじた。

一方、自衛隊音楽隊奉納演奏は当宮遷宮祭の折にも奉納された航空自衛隊西部航空方面隊、山田音楽隊長以下二十八名の隊員による奉納で、一日の大祭終了直後に神前に奉納演奏、続いて本殿脇広場で約一時間に亘り軍歌、民謡、歌謡曲、童謡など、盛だくさんのプログラムが消化されて参拝者もしばし音楽に聴き入っていた。

また、献花は池ノ坊小方門下により大祭期間中ずっと旧斎館（宿舎）に展示され、女性参拝者の目をひきつけていた。

なお神賑行事に御協力いただいた各種関係者に謹意を表したい。

氏子総代会開催
沖中両宮大祭など

去る三月十五日（水）当社春季大祭を目前にひかえて氏子総代総会が開催された。

当日は、小春日和のもと午前十時半から月次祭が斎行され、立石氏子会々長をはじめ出席の総代七十余名が参列した。終後清明殿に於いて総会を開催し、先づ立石氏子会長の挨拶、続いて竜津宮司が当社の現況を述べ、議題に入った。槇本農式課長より春季大祭、沖中両宮春季大祭、神賑行事日程表などが読み上げられ、総代各位の協力を願い了承を得た。

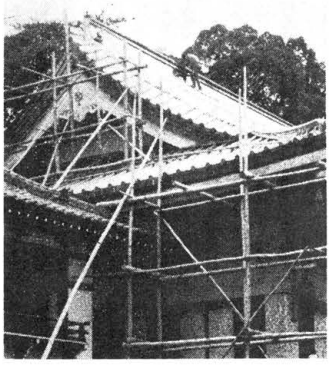
春季大祭の氏子奉答については福間町で相談されること、又氏子総代より昭和四十八年度分氏子納金については、従来、一戸年間七十円であったのを、昭和四十八年度分から壱百円にするなどが決定した。

その他活発な意見の交換後、斎館に席をうつして、直会に入り午后三時散会となった。

境内の御案内

当社心字池がきれいになった事は既報の通りであるが、この池の廻りに植えられている"ツツジ"がはころび出して心字池により一層の華をそえている。見頃は今月下旬が最高と思われる。

"完成真近"
別格本山　鎮国寺屋根葺替



宗像郡玄海町吉田に鎮座され、国法身代り不動で有名な鎮国（立部瑞祐住職）の屋根（銅板）葺替工事が篤信家、地元民の浄財によって昨年十二月に着工し、現在九分九厘の仕上りを見せ、四月二十八日の護摩法要に業者より引渡しの運びとなっている。特に本年は、弘法大師生誕千二百年を迎え全国の真言宗系寺院では各種の造営事業や奉祝法要等が企画されており、鎮国寺の屋根葺替も中間入りの事業となった。

屋根の面積　百二十坪。銅板（規格品）三千二百枚使用。施工、小野工業株式会社

（写真は竣工真近の鎮国寺本堂）

漫筆明暗箱 (2)

玄翁と赤紙

玄翁は石を割る鉄槌である。一般家庭には見られないが、石材を扱う職業には欠かせない主要な道具となっている。赤紙は戦後には見られぬ召集令状である。否応なしに一般の青年を徴召した紙だが、かつては冷厳な国家の至上命令の役割を持っていた。これを手にすれば、その瞬間に個人の一切の自由は失われ、生命も自己のものではなかった。

二十余年ぶりに邯馬渓を訪れて、戦後の混乱を縫けて帰ってきた住んだ青峰の合間に、ふと玄翁と赤紙が脳裡に浮かんだのである。

鉄槌は彼生に乗れた玄翁和尚の故事から、玄翁の名は出たという。多数の遊客で賑わう青ノ洞門が、里人の難儀を救い自分の罪業を償うため開削した玄翁を想い起させる。

岩壁の掘鑿に悲願をかけた理僧は名を禅海、菊池寛の有名な戯曲「恩讐の彼方へ」によって和尚の事蹟は、天下に知られ名勝青ノ洞門となったのである。禅海と名乗けたレストランはじめ洞門近くに立ちならんで、流れの観光客誘致の変貌が痛ましさを感じられる。里人は難所から救われた苦と違って、今客商売に救われているのであろうか。繁昌している。

禅僧は立派な遺徳を完成して殆んど無用となった事蹟を、今観光資源として役立っている。戯曲の霊は、山国川のせせらぎに集って派手なレシャーブームを展開する現代人を、何と思うだろうか。

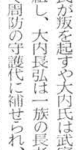
悲願三十年の苦行は、今日歓楽の場を残している。

ペンチに腰をおろして、持参の弁当を開いている数人の老婦人がある。傍らでその語る話から想像すると、戦前か戦時中か、同じ職場の若い夫婦数組が誘い合って邯馬渓に休日を楽しんだようである。

老婦人はみんな女戦場に失った未亡人の会のメンバーらしい。話は夫在りし日の行楽の思い出から戦後の混乱期に、遺児を養育するため身を粉にして働いた過去の回想の片々。

「禅海さんは人々の危難を救うため、世の幸福のため生命を捧げた。主人らは国家のため国民のため、可愛い家族や郷土のため、死ねと言われた。その犠牲の犠牲が今日何のためになっているのだろうか。傷ついて飢えて屍さらした戦場は、この邯馬渓と同じ」

何かその怨みをこめた愚痴とも聞かれた。赤紙は数百万の生命を、好もと好まざるとにかかわらず死地に走らせた。赤紙は千万を越える遺族に悲痛を残した。



昨年奇蹟の生還を遂げた横井庄一氏、今日何度目かの捜索隊が求める小野田少尉、或は他にも生き残っているかも知れない兵士、いづれも不幸な運命を負った人々である。戦後は終っていない。

ベトナムの停戦は不幸な住民に一応安堵を与えた。平和が帰ったかに見えるベトナムの村落風景や米兵を迎えた家族の表情が、報道される昨今の情勢は、他国のことながらわれらにも快く感じられるが、一面防衛論議が盛んはじめ新聞雑誌に喧しい時、果して真の平和がどこにあるのか。邯馬の渓谷にかおる椿花は何お答えない。

栄光も汚辱も凡て自然の流転の中に明滅する現象と観れば、神仏えの信仰は自然に結晶する人間の祈りであろうか。数珠を手に一禅海さんお気の毒さまと寂く笑いながら、会長格の白髪婦人が起ち上った。その横顔は還暦以上の何かを語っていた。

玄翁と赤紙、悟道苦行の宗教理念と祖国護持の国民感情、果てしない平和と戦争の歴史を天秤はつづりつづけるのであろうか。誰にも解けぬ謎である。

（発生）

神湊（こうのみなと）(28)

楠早鳥作
福田長庵画

使者　その三

郡境の垂水峠を越えると頃から若者はすばるに今から訪れる国の状況について語りだした。

瀬戸内の海賊衆を大きく支配しているのは長門国山口に居を定める大内氏である。

百済の琳聖太子を祖に仰ぐ大内氏は周防国大内村に鑄錫に従ってその勢力を蓄えてきたが源平の壇浦合戦に際して源氏に組し大功を立てた。やがて頼朝により武家政治が開かれるや周防国は天寺の知行国であったためか護はおかず大内氏は十代弘盛后、満盛、弘成、弘貞、弘家、重弘ら代々周防の権介として国庁の一員に列したが、幕府からは源氏の家人でないにもかかわらず、武将として特別な待遇をあたえられた。よって予章記に「周防大内介、伊予河野四郎、この両人は惣じて西国居住の輩、一列の仁にあらず」と記され、大内氏系図には弘盛この時の功により、長門国を賜わると書かれている。

この頃から長門の一部にもその勢力を伸ばしていたのであろう。

長門国は関門海峡の要衝を含む関係上、幕府は守護の人選も慎重に行った。はじめ頼朝は腹心の土肥次郎実平を守護、土肥次郎を守護代としたが文久二年（一一八六）宇治川の先陣で有名な佐々木四郎左衛門高綱をもってこれに代えた。その后、幕府は代々有力な御家人をもって守護に任じたが蒙古来襲にのぞんで九州の問題を控す氏が叛を起すや大内氏は家方に組し、大内長弘は一族の長老として周防の守護代に補せられ、尊氏の信頼も厚く盛名をほしいままにした。

この間において大内氏の嫡流を断、土貢のことに至るますべてこれを管轄させた。この時から守護の称を改めて長門探題、あるいは中国探題となし、北条氏一門の世襲としたのである。これは元弘三年（一三三三）五月北条高時が誅に伏し鎌倉幕府が滅亡するまで続き、幕府滅亡と同時に長門探題の称を廃し守護に復した。

以后、地頭は公領、私領の別なくこれをおき大部分は地方の豪族をもってそのままこれに任じた。特に周防国においては、大内氏が世襲的に国内に勢力を有していた関係から、その被官の中にも地頭に任ぜられるものが多く、また被官でないものも、進んでその庇護を求めるに至った。大内氏は源氏の家人であるとの名目をもって長門に進め、厚東氏系代の本拠である厚狭郡霜降城を攻め、同十三年正月長門守護職厚東義武は敗れて九州に逃れ再挙をはかった。弘世は）の功により宮方から長門の守護職に補せられ、六月二十三日に入府した。翌十四年十二月厚東氏の残党を国府（長府）の四王寺山に攻めこれを滅した。ここに長門国もほぼ弘世の有に帰したが、同十八年弘世はにわかに志を変じて武家方に属し、二代将軍足利義詮から改めて防長二国の守護職に補せられた。

この頃、長門の国人は既報の通りであるが、この池の廻りに植えられている"ツツジ"がはころび出して心字池により一層の華をそえている。見頃は今月下旬が最高と思われる。

を大内氏に求めるに至った。大内氏が周防権介であるながら、諸国の守護以上に実力を有していたのは、その管内の地頭との間に、このような緊密な関係が存在したから世に通ずるにいたった。ここにおいて弘世は、おもむろにその矛先を転じ長門国の守護職厚東義武と雌雄を決することとなった。

正平十年（一三五五）大内弘世は、はじめて兵を長門に進め、厚東氏代々の本拠である厚狭郡霜降城を攻め、同十三年正月長門守護職厚東義武は敗れて九州に逃れ再挙をはかった。弘世は）の功により宮方から長門の守護職に補せられ、六月二十三日に入府した。翌十四年十二月厚東氏の残党を国府（長府）の四王寺山に攻めこれを滅した。ここに長門国もほぼ弘世の有に帰したが、同十八年弘世はにわかに志を変じて武家方に属し、二代将軍足利義詮から改めて防長二国の守護職に補せられた。

後醍醐天皇の建武新政と足利尊氏の反乱の時、大内氏は家方に組し、大内長弘は一族の長老として周防の守護代に補せられ、尊氏の信頼も厚く盛名をほしいままにした。

この間において大内氏の嫡流を断、土貢のことに至るますべてこれを管轄させた。この時から守護の称を改めて長門探題、あるいは中国探題となし、北条氏一門の世襲としたのである。これは元弘三年（一三三三）五月北条高時が誅に伏し鎌倉幕府が滅亡するまで続き、幕府滅亡と同時に長門探題の称を廃し守護に復した。

以后、地頭は公領、私領の別なくこれをおき大部分は地方の豪族をもってそのままこれに任じた。特に周防国においては、大内氏が世襲的に国内に勢力を有していた関係から、その被官の中にも地頭に任ぜられるものが多く、また被官でないものも、進んでその庇護を求めるに至った。大内氏は源氏の家人であるとの名目をもって長門に進め、厚東氏代々の本拠である厚狭郡霜降城を攻め、同十三年正月長門守護職厚東義武は敗れて九州に逃れ再挙をはかった。弘世は）の功により宮方から長門の守護職に補せられ、六月二十三日に入府した。翌十四年十二月厚東氏の残党を国府（長府）の四王寺山に攻めこれを滅した。ここに長門国もほぼ弘世の有に帰したが、同十八年弘世はにわかに志を変じて武家方に属し、二代将軍足利義詮から改めて防長二国の守護職に補せられた。

一方九州に逃れた厚東義武は、足利義詮の弘世に対する厚遇に憤慨して菊池、名和氏等の九州の宮方と結んで長門国の恢復を策した。ここに関門海峡の衝をさしはさんで公武の間にしばしば争奪戦がくりかえされた。

今川了俊が九州探題に任ぜられ西下の途についたのは、この頃であった。

弾圧、二十四代弘世父子は不快を内に蔵していたが、ただ将来の見透しがつかないまま、十数年の間隠忍自重して長弘の下に屈し、武家方の立場を守り続けてきたが、正平五、六年の頃から、ようやくその態度を明かにして宮方に転向し同七年二月弘世はみずから軍兵を率い、長弘一族の本拠である都濃郡鷲頭庄を攻めて勝を獲た。これにより周防国の豪族は皆款を弘

灯台見廻り船『げんうん』

沖の島にも就航す

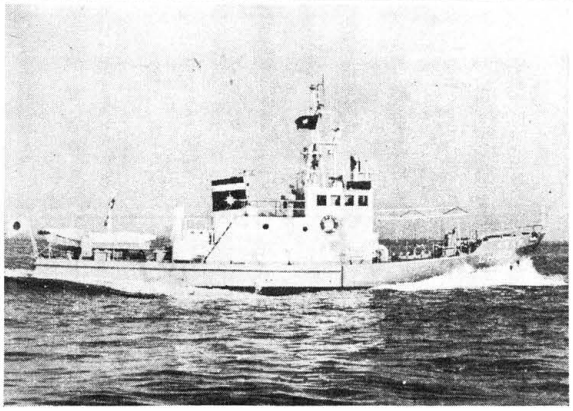
春うららかな三月三十日、福岡海上保安部に於て、新造灯台見廻船『げんうん』の就役披露が関係者多数の出席により盛大に開催された。この『げんうん』は、全長、二二、一〇メートル　幅、四、六五メートル　深さ、二、三〇メートル　資格　沿海区域　総トン数　五〇、一〇トン　乗組員　六名　常用速力　一〇、二八三KI　主機　六M型二〇〇PS一基と、スマートな船形をなしている。また灯台の集約管理化に伴い、昭和四十八年度より無人化された玄海島、沖ノ島、筑前大島灯台の重要標識に無線による遠隔装置が取り付けられている。この三基地を重点に第七管区の沿海区域を見廻り、その状況が保安部の機器で把握できるように設計されている。

この『げんうん』の就航により、心配された無人灯台にも、従来と変わらぬ監視の目が注がれ、暗海の船に航海の安全と警備の役目を果たすこととなった。

「喜びも悲しみも幾年月」

灯台に長年勤務された職員の方々に感謝するとともに『げんうん』の無事活躍されんことを祈りたい。

写真はげんうんの勇姿



話題の新車をみる（三）

ニュー・117クーペの巻

主要都市を中心とする周辺の環境汚染が予想以上に進んだ結果、いよいよ光化学スモッグが社会問題の第一に取り上げられる様になり、特にその主要原因とみられる自動車有害排出ガスがクローズアップされるに至った。

これに対して、排気ガス規制が五十年、五十二年のマスキー法をめざして漸次進められ、諸々の問題を抱えてはいるが、いよいよその第一弾として四月一日から、運輸省より「四十八年自動車排気ガス規制」が実施されることとなった。

これはこれまでのCO規制と比べ甚だ強力なもので、光化学スモッグの主犯である炭化水素HC及び窒素酸化物NOxの制約を課したものである。

内容は、①今月四月一日以降、メーカーから発売される新型車は既に対策のマークが付される。

②現に、生産ライン過程にある新造車は、本年十二月一日以降適用される。

③一八〇〇CC未満の中古の場合、昭和四十三年一月一日以降から五年以上経過した車は、対策機器の供給不足という惑で、ユーザーとしては、四月末日迄に"点火時期の調整"をせねばならない。

これら規制措置の影響として燃焼率の多少の悪化や、加速時・登坂時の走行に最適と言えよう。

さてドライバー読者への新情報はこの位にして、今回はメカニ定評のあるいすゞのニュー・クペ117を紹介したい。

この新117シリーズには、一八〇〇CCのDOHCエンジンを積んだXCとXTの計四機種、二〇〇CCのSOHCエンジンを積んだXEとXG、同一八〇〇CCのSOHCエンジンがあり、各々クーラー付も別に用意されている。

エンジンは高速での余裕と低速でのねばりをもった、いわば"低中速型"のもの。繁華頻雑な市街地等の走行に最適と言えよう。

ブレーキは倍力装置をもつ二油圧系統に独立させたタンデムマスターシリンダー。前輪ディスク。

その他、熱線入りリアウインドー、昼夜切換防眩脱落式ルームミラー、セーフティベルト等が装備されている。

また、特にXEのキャブレターは、コンピューターによる電子制御燃料噴射方式装置（ECGI）が施されている。

人形師故白水八郎翁

遺作展行なわる

「人形屋武平五代目の直流として福岡県無形文化財、白水八郎さんのひたむきな生涯は、武者ぶりに満ちて豪快に歩む博多人形作家の道だったと申せましょう。わざのきびしさは、得意だった能人形のヒノキ舞台のそのままに、華やかな栄誉のかがやきは、夜空を染める五彩の花火のように……

いま残された作品群を眺めて湧き上るのは、この人が多唱した軍艦行進曲、その男壮潔烈の調べともいえるようです。

この文は、三月二十二日より一週間福岡市の大丸デパートで開催された「博多人形作家白水八郎遺作展」の会場に掲げられていたものであるが、この小文の中に故人の人となり作風が端的に述べられていると言えよう。白水氏の博多人形師としての輝やかしい業績は、最高の栄誉である通産大臣賞三回を始め数々の受賞が物語っている。

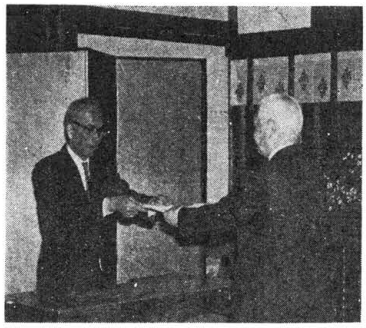
また氏は典型的な博多っ子として生涯を通し、心から博多を愛し古い博多のよさを何時までも残すために尽力された人でもあった。

一昨年秋、宗像大社御造営の完成を祝って、大宮司氏貞公の座像を奉納されたが、その制作時には既に病魔に犯され療養中の身であったが、病苦を押して制作に没頭完成されたものである。この作品は治乱興亡の乱世に、近隣勢力の侵略を排撃し神郡宗像の存立を全うした戦国武将氏の英傑、武将大宮司氏貞公の毅然とした風貌をよく表わし、観る人に深い感銘を与えている。目頃は当社初代御造営に飾られているが、この度の遺作展開催にあたり、御眷族の要請により特に出品された。会場には約六十点の傑作が展示され、その中央に氏貞公の座像が氏の真筆になる墨書の由緒文と共に飾られたが、場内は豪快で華やかな作風を偲ぶアンで非常な賑わいをみせていた。また、氏の人形制作に対する凄じいまでの気迫が感じられ、粛然として襟を正す思いであった。

氏は昨年六月、ガンのため六十四才で逝去されたが、生前の傑業を偲び心から御冥福を祈るものである。

老人大学修了式

"おめでとう皆さん"



境内の桜も急速に咲き出した去る三月二十九日、玄海町老人大学の修了式が当社清明殿で行われた。

午前九時三十分、八十名の学級生参加のもとに始まり、先ず入江教育長が高令者教育の重要性と県下の高令者教育の現状を説明、今後も積極的に参加される様学級生に要望された。

続いて修了証書が皆勤者十六名、精勤者五十三名に授与された。

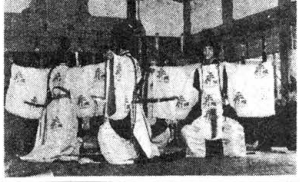
修了式後、簡単な宴会に入り談笑のうちに終了した。

昨今"生涯教育"という言葉がよく使われているが、玄海町老人学級講座は多種多様の行事が組まれ活発に運営されている。

今後共なお一層の発展と学級生一同の御健勝を祈りたい。

風俗舞の部

浦安舞　奉仕者紹介



風俗舞の部

川上耕一君（24）左官業、職業に似合わず生花を好み、社交ダンスは玄海町役場で行なわれているダンスクラブの先生、麻雀は目下下手?の横好きと友人は言う。ともあれ真面目な好青年。

井上光生君（22）農業、現在田島地区青年団団長、農家の長男として畑仕事に専念するかたわら青年団の運営に腕を振るい暇な時は大島に行って磯釣りを楽しむおとなしい性格の持主。

田中保政君（22）玄海町農協職員、青年団副団長、スポーツ万能（自称）で中でも長身を利したバレーボールは玄海町チームのリーダーで会長を務める実共に地区の第一人者。愛車"セリカ"に乗って業務遂行とばかり共済保険の取立ノ独身職員にとっては招かざる客。社交ダンスは川上君の下で練習中。

花田安輝君（22）津屋崎町農協職員、趣味は社交ダンスと自動車運転、大柄な体格に似合わずおとなしく古武士を思わせる風格の持ち主。

浦安舞の部

福崎優子嬢　田島消防団副団長福崎健司氏の次女。趣味はレコード鑑賞

戦尾千春嬢　玄海中学校教師戦尾義光氏の長女。趣味はレコード鑑賞、ピアノを弾く事、マンガを書く事と幅広い。

吉武玲子嬢　神湊郵便局勤務吉武弘道氏の長女、趣味はレコード鑑賞（歌謡曲）

中野真知子嬢　碎石業を営む中野久虎氏の次女、趣味はレコード鑑賞、歌手郷ひろみのファン

酒処

「吉野盛」本舗吉野屋酒造有限会社の巻（3）

今回は宗像最大の酒処、赤間の地で"甘口"の酒造りをモットウに吟醸されている「吉野盛」の巻。

社屋は宗像郡宗像町赤間の中心地にあり、一歩酒蔵に入ると、スラリ並んだ近代的なホーロータンク群が目を引く。当社は明治初期、門司茂造が現在地に酒造業を創設し屋号を「幸福屋」と称した。二代目門司市太郎の子、門司松次は人一倍の働き者、屋号を「吉野屋」と改め、今日の吉野屋の基礎を作った。

大正の中期より昭和の初期にかけて多難が続き、特に戦時中原料米不足の為一町村一工場の企業整備で吉野屋工場は保有工場となり、昭和十八年より二十一年まで四年間休業等した時の苦労が一番辛かった。

昭和十五年津屋崎町桂より杜氏を迎え"甘口の酒"を看板として「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

昭和十五年津屋崎町桂より杜氏を迎え"甘口の酒"を看板として「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

昭和十八年より二十一年まで四年間休業等した時の苦労が一番辛かったと古老の述懐を聞く。

酒銘は「吉野盛」と「門の松」「勇勢」を使用していたが、昭和三十四年十一月に個人から法人組織に切りかえ、会社名より「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

昭和十五年津屋崎町桂より杜氏を迎え"甘口の酒"を看板として「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

当社は明治初期、門司茂造が現在地に酒造業を創設し屋号を「幸福屋」と称した。二代目門司市太郎の子、門司松次は人一倍の働き者、屋号を「吉野屋」と改め、今日の吉野屋の基礎を作った。

大正の中期より昭和の初期にかけて多難が続き、特に戦時中原料米不足の為一町村一工場の企業整備で吉野屋工場は保有工場となり、昭和十八年より二十一年まで四年間休業等した時の苦労が一番辛かった。

昭和十五年津屋崎町桂より杜氏を迎え"甘口の酒"を看板として「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

昭和十五年津屋崎町桂より杜氏を迎え"甘口の酒"を看板として「吉野盛」を主銘柄として「門の松」を併せて使用することになり現在に及んでいる。

昭和十八年より二十一年まで四年間休業等した時の苦労が一番辛かった

宗像大社歌会 俳句作品集（二三）

盆栽の梅盛りなり客を待つ　田島　有吉　唐水

神木の大霜囲ひ新しき　東京　小浦　太平

活けし梅堅き蕾もひそと咲く　田熊　安部　ゆき

さかさ富士写して眺げる春の海　藤沢　玄洋　子

櫟門をくぐれば彼岸桜かな　津屋崎　菱花　女

石けりて登校する子や寒ゆるぶ　東郷　有吉　春子

寒のバス厳の如く来て空ッぽ　久留米　篠田太郎坊

元冠の修羅場防塁春の風　大井　安部　重郎

高架線工事現場も梢野かな　大井　吉田ますみ

白梅の翁端午に抱いて　宮田　来島　艸雨

冬ぬくし足なげだしてさすりけり　福岡　入江　柳江

大日の薪眼覚き初詣　小倉　伊豆　湧泉

宗像神社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十四年度調査報告

沖ノ島

調査を始めると、内部は既に攪乱されていて、遺構、遺物はほとんどみとめられなかった。母岩から剥離した岩や表面の腐植土を除くと直ぐに古代祭祀当時の床面になる。床面はほぼ水平で、一応しまった面を形成している。遺構らしきものは余然見当らず、もっとも、石を敷くなどの施設はなかったものと考えられる。

遺物の出土状況は、散乱し状態で原位置をとどめるものはなかった。時代的にも幅が広く、祭祀の形は変わっても後世奉献されていたことを示すものがみられる。古墳時代のものとして歩揺付雲珠の断片、鉄製品、滑石製小玉が主で、大部分の遺物はとりさされていた。断片的な遺物なので明確な時期を与えることはむずかしいが、一万点以上の小玉、鉄斧などからすくなくとも五、六世紀代に祭祀が行なわれていたことを知ることができる。

洞穴の西半分には古墳時代の遺物は余然みあたらなくて、ここは使用されていなかったことがうかがわれる。ここには近世の紅皿や近世から現在まで神社の祭祀に使用されている素焼き皿、徳利などが奉献されていた。おそらくは沖津宮のまつりに使用されたものであろう。この四号遺跡は古墳時代においては他の岩蔭遺跡と同じ立場にあった。その後沖津宮の社殿がおかれ、そのあとに他の遺跡のもの収納し、「御金蔵」と称されたのだと考えられるのである。

八、一八号遺跡

I号巨岩士にある。I号巨岩には、十八号を中心に二五号、一六号、一七号、一九号、二三号の六つの祭祀遺跡が集中している。

一八号遺跡は、南から北に向かって傾斜している。岩士には、北端に四〇㎝大の石が四個あり、留石のようなものではないかとおもわれる。前回調査時には、ここに二m大の石がおかれてあったという。

遺物は、この石の付近と、南側の石の割れ目に出土した。それはまとまったものではなく、散在しているという状態である。

北端の石のあたりに管玉九個、鏡片、鉄片等があり、南側の石の割れ目にはガラス玉管玉があった。

鏡はすべて破片で約二〇片あり、一つは鳳凰鏡で、直径約二二㎝で鏡面には朱が残っている。前回一七号出土のものとほぼ同一形式のものと考えられる。他の一つは三角縁獣帯鏡の外縁の一部と考えられる。

玉類には、管玉、棗玉、ガラス玉、滑石製小玉、がある。管玉は碧玉製五個、閃緑岩製二〇個である。大きさは一、八㎝～三㎝である。ガラス玉は、約一七〇個余りで青色のものと紺色のものがある。滑石製小玉は約一〇個ある。棗玉は碧玉製、長さ約一㎝で、まわりに縦紋状の刷込みがある。

その他に、碧手刀子二個分がある。二つとも柄の両面に杉文を

二、二〇号遺跡

沖ノ島祭祀遺跡の中で最も古い一七・一八号遺跡を形成するI岩巨岩の東南方向にある。第二次の調査で一四号遺跡と呼ばれている須恵器散布地の直上に位置している。現在樹木によって巨岩が二つにわれているが、巨岩としては大きなものではない。巨岩の岩蔭を利用し、岩蔭の高さがせいぜい五〇㎝位、広さも約二㎡程度で、前面には広場を持たない極めて小規模な祭祀場である。巨岩の前面は約四〇度の傾きをもつ斜面になっており、旧軍用道路につづく。先にのべた一四号遺跡はこの二〇号岩蔭遺跡からながれたものが集まったところをさしている。沖津宮裏巨岩群の祭祀遺跡は西部分が南四を向いているが、この遺跡は北東を向いている。

遺物は、石製の鏡、玉、鉄刀のセットがある。玉はすでに祭祀用品としてのみの用途しかもたないものに変化し、鏡の代用品と推定される径一一㎝で一方に孔を穿つ滑石製模がある。また玉には大形の巨玉があるが、この遺物は比較して立派である。小杯は須恵器、土師器が主なものであるが、ことに金銅製の小杯は他の五号、二三号遺跡からも出土しているが、当遺跡のものだけは高台がつかない類のもので、若干趣を異にしている。須恵器は大甕、平瓶、長頸壺の類があるが、大甕は五号遺跡でもセットをなしており、土器祭式の一種のパターンであったと考えられる。面白いのは土師質の高台付広口小形壺である。胴部には孔を穿っており、他に例を見ない。

（つづく）

二宮佐天茲主人

四島一二三伝

―原田種夫著―

主な輸出品では、木材・穀物・羊毛・紙・食肉・かんづめ・冷凍食品がある。輸送機関の充実と豊富低廉な電力を利用して、造船・製材・製紙・青果・サケかんづめ・バターの製造などがさかんに行われる所だ。人口が増加したのは、前にもちょっとふれたように、十九世紀末年のアラスカのゴールドラッシュと、一八八三年（明治十六年）の横断鉄道の開通の結果であった。

四島青年の乗った英貨物船プレマー号が、そのポートランドに着いたのは、横浜を出航してからじつに三十四日目であった。一カ月と四日かかったことになる。なにしろ、明治三十年といえば、今から七十年も前のことである。現代のスピード感覚からいえば嘘のような気がするけれども、じっさい、それだけの日時を費やさねば渡米することは出来なかったのだ。その長い長い船中での時間から生まれてくる死ぬほどの退屈さと単調な時間のくり返しは、きっと苦痛であったにちがいない。それに船は貨物船なので、あまり設備はよくないし、ポートランドにつくまでの三十四日間、きちんとした入浴は一回も出来ず、そのため、シラミがわいて閉口した、ということである。

だが、ついに、四島青年は、ポートランドの土を踏んだ。整然と建ちならんだ白亜の高層建築や、綺麗な道路を行き交うたくさんの外国人の群れ、街をいく馬車にはきちんと服装をととのえた紳士がいて時々鞭を鳴らしてゆく、舗道には街路樹がきちんと間隔をおいて植えてあって、緑の葉を微風にそよがせていた。生まれてはじめて目にふれる異国の風物であった。日本の、しかも都会を遠く離れた寒村で成長して来た四島青年にとっては、はじめて目にふれる外国の風景は、一つの驚異であったにちがいない。てんで言葉もわからず、どこが東か、どこが西なのか方角さえもわからないのであった。まったくの未知の国なのだ。同時に、自分の運命がこれからどう展ていくかさえもわからない。四島青年は、まったく見知らぬ世界に、トランクと洋傘をもったまま立ったことになる。まことに、四島青年が立ったポートランドのその地点が、かれのアメリカ生活の最初の点であった。その点がやがて緑として伸びていったわけだ。

未知の国で、未知の人びとの中で、四島青年は一人で生きてゆかねばならぬのであった。一も努力、二も努力、勇気をもって本日を生き明日へ突進していこと固く心に誓った。鉄は熱い内に打たねばならぬ。これから、あらゆる苦難が襲いかかって来るにおいない。鉄の意思をもってすべてのことに対峙しなければならない。全身に力がみなぎり、青年の顔は紅潮していた。四島青年は、大きく胸を張り、異国の空気をうんと吸った。手にした洋傘の先端はぐさりとポートランドの地面を突き刺していた。

第六章流浪の時代

四島青年は、ポートランドからさらに南下して太平洋の玄関口で、山あり谷ありで景勝地が多いサン・フランシスコに辿りついた。当時サンフランシスコには、すでに電車が通っていて、登山用のケーブル・カーさえかかっていた。しかし、まったく言葉がわからないのである。言葉はいうまでもなく、人間の思想や感情を表わして人に伝達するものである。話す、聞く、読む、書く、そのいずれも言葉がわからねは出来るわけがない。それでは、相互理解ということもあり得ないし、アメリカでの生活は駄目になるのだ。

いちばんはじめに、四島青年は、サンフランシスコで簡易ホテルに住み〜こんだが一日七十セントを払わねばならなかった。この簡易ホテルの経営者はアメリカ人の老人夫婦であった。宿賃をどうかして稼ぎたいと思って、何か手伝いをしたいということを、手真似で示すと、老人夫婦にもそれがわかったと見え、ジャガ芋とナイフをくれて、地下室で芋の皮をむいていこと命じられた。すべて手真似での交渉であった。しばらく時間が経ってから呼ばれた時は、もう地下室にいっぱいあったジャガイモの半分以上もむいていたので老人はびっくりした。老人はほんの夕食分だけの作業を命じていたのであった。その宿泊だけの簡易ホテルでは、スクール・ボーイの四島青年は宿賃かせぎに皿洗いをしたこともあった。銭になることは色々とやってみたのである。しかし、大切な英語を覚えることができなかった。これではいけないと思い学校に通って勉強しようと思った。

そこで、ある家にスクール・ボーイとして住みこんで夜学校に通学することになった。スクール・ボーイというのは、朝晩手伝いをして夜だけ夜学校に通わせてもらうというやり方で、その家では週三ドルという給料をもらった。夜学校では初歩からの英語を一心に習った。英語をよく覚え、一通り米人と話が通じなければアメリカ生活はにもならないのだ、と思って一生懸命に一年ぐらい勉強をつづけたのである。

スクール・ボーイの生活が一年ぐらいつづいて、どうやら、目常会話が曲りなりにも出来るようになり、読みかきもやれるぐらいになった。四島青年は十八才になっていた。これならば多勢の人に混って働いてもあまり不自由は感じないという自信がついた。そこでサクラメントの農園に雇われて野菜つくりの仕事をはじめた。サクラメントは、カリフォルニヤの州庁の所在地でサンフランシスコの東北の町であった。そこには長くいないで、次にホップス農場に職場を替えた。そこで仕事がうまくいったの何とか独立したいと考えた。人に雇われて働くよりも、自分で独立して多くの人のマスターになろうと思ったのだ。しかし、大量請け合った ホップスの乾燥に大失敗をして、ついに、農場主は何頭もの馬まで売り払ったという状態に立ち至った。そこでこを去ってサクラメントの郊外にあったナトマ葡萄園に働くことになった。

そこには、日本人が五十人ぐらい働いていた。ついでながら一八八四年（明治十七年）に支那人排斥法が実施され、一八八八年（明治二十一年）頃からは、カリフォルニア州穀物耕作は最実の栽培に転じ、東西大陸を結ぶ鉄道建設事業もまた進められていた。それで多数の日本人が白人の社会にも流れこんでいた。これが後にいろいろの社会問題を起こし排日の機運をたかめたのであった。

さて、ナトマ農園に働くことになった四島青年は、ここでも身を粉にしてよく働いた。ところが、この農園での日本人労働者は何人か集まると、すぐに賭博にこったり、酒を飲んだりしてまじめに働くという状態であった。この男は四島青年がきっと小金をためているに違いないとにらんだ。それというのも氏が皆ともかくも飲まない生まじめな男なので、そう思ったのであろう（四島青年はポートランドに着くとともに、もう親不幸はしない、酒もタバコもぜったいにのまない、という誓いを立てているのであった）そこで、ある夜、四島青年に賭博をしようと誘いかけてきた。

（つづく）

〔孝子正助の廟〕（二）

その頃びんぼうな百姓仲間では、親を呼ぶのにもそまつな言葉を使いましたが、正助は何時もていねいに

「おとうさん」「おかあさん」と呼びました。又外から帰った時には、必ず膝をかがめて家にはいりました。そのわけをたずねる人があると、正助は

「私のようないやしい者の親には、私より外に、誰もおじぎをして上げるものはありませんから」と答えていました。

父が六十で中風という病にかかり、母も年をとって憊がおとろえてからは、正助の孝養はますますあつくなりました。耕作にひまのない身ですけれども、朝夕の食事は自らととのえて父母にすすめ、父が厠に行く時はその度毎にせおいました。

或日、父が他家に嫁いでいる正助の妹にあいたいといい出したので、正助は父をせおって行ったとかありました。その時に、

「今日はおとうさんをせおう心持が何時もより軽かったが、これはおとうさんがおとろえなさったためであろう」

といって、妹に涙ぐんで話しました。

父は病気になってから、十八年目にとうとう死にましたが、正助の悲しみはよその見る目も気の毒なほどでした。父の死後は八十に近い母のため、耕作と夫役の外はめったに外出もしないで、明け暮れ母のたわらにいて、母の心をなぐさめることにつとめました。其の上父の事も忘れないで、毎日の墓参りをかかしませんでした。近所から果物や菓子などをもらうと、自分は食べないで半分は父の墓前に供えました。

やがて正助の行ないが殿様に聞えました。殿様は大そうお喜びになって、ほうびに田地をおゆりになり、租税も納めないでよいと仰せになりました。しかし正助は、それではあまりにももったいないといって、租税だけは納めることにしました。

正助はかように親に孝行をつくしたばかりでなく、平生より人の誰よりも早く納め、夫役には進んで出ました。又あわれみの心が深く、正直な上に人の吉凶を聞くと、まるで自分の事のようにくよくよ者が殆んどなかった。そういう怠惰でだらしない日本人の姿を見ることは青年にとってはやり切れないことだった。炭鉱の鉱夫の荒れすさんだ、そして卑猥な生活を見てあきれてしまった事があったが、農園での日本人の生き方を見るとそれと大差がない。

ボスは鼻の下から顎にかけてまっぱいの巨漢で、どこか熊を思わせる荒つぽい男であった。この男は四島青年がきっと小金をためているに違いないとにらんだ。それというのも氏が皆ともかくも飲まない生まじめな男なので、そう思ったのであろう（四島青年はポートランドに着くとともに、もう親不幸はしない、酒もタバコもぜったいにのまない、という誓いを立てているのであった）そこで、ある夜、四島青年に賭博をしようと誘いかけてきた。

（つづく）

〔仏師徳増〕（二）

文化三年、その五十四回忌に際し仏師種徳園がものしたという、生げるが如き翁の肖像を祀れる廟中には、翁の遺物と共に各知名の士より贈られた讃徳の揮毫が溢れ、前庭の天空を芳薫に染めてほほ笑む咽り七尺の老桜（タイザンボク）と共に、餘光永く郷党に薫郁せり。

○子を思ふ親ほど親を思ふなは世に忠孝の人と言はれむ

（出光富長翁）

尚実物としてここに珍蔵せられているものに次の品々があります

一、馬鞍――生前翁の使用したもので、翁が馬を愛するの餘りよく之を自ら育にして家路を辿ったという事は除りにも有名な話です。かくて各地の先哲遺物博覧会等にと引出されるとかで、説明の粘れが幾重にも附けられています。

一、鋤先――同じく翁が生前使用のものと云われています。

一、藩公諸士の褒状並に御沙汰書（二巻）

一、武丸集句の短冊集

完

先月と今月号に掲載しました「孝子正助の廟」は宗像出身、田中幸夫氏の著書〝宗像の旅〟より引用致しました。